

適正施設ガイドライン

【コサンケイ *Lophura edwardsi*】

2025年2月

公益社団法人日本動物園水族館協会

1 飼育環境

コサンケイは生息地以外の環境に比較的適応する能力を持ち、キジ類の中では唯一雨を好む傾向があるとされている等、比較的丈夫であるとされている。しかし、各園での飼育環境に応じて、温度・湿度・換気等の管理を適切に行うように努める必要がある。

1-1 温度・湿度

一般的に、コサンケイは比較的寒さにも強く、屋外での飼育が可能であるが、飼育施設には防霜のための小屋または風雨を避けるためのカバーを設置する。本州以南の温暖な地域では屋内の飼育施設に暖房等を設置する必要は無いが、気温が0℃を下回る場合にはヒーターを設置する。屋内で飼育する場合には、個体が自由に快適な温度環境を選択できるように、温度条件の異なるエリアを2か所設ける。湿度について明確な定めは無い。

1-2 照明

飼育について照度等の明確な定めはないが、熱帯雨林に生息する種であることから、強すぎる日差しは避け、屋外放飼場においては植栽や寒冷紗などを用いて適切な日陰を用意する。

1-3 音・振動

本種は、一般的には音や振動についてある程度の適応力があると考えられるが、草刈り機や工事の騒音等、新しい刺激に対して驚き、急に飛び立つことでケージ内での衝突事故が起こる可能性もある。そのため、特に飼育面積の小さい鳥舎において通常では聞かない程度の音や振動が発生する作業を行う場合、細心の注意を払う必要がある。

1-4 面積

下記面積を最低限必要な面積とする。

- 1) 単独またはペアをキジ舎等で飼育する場合：1ペアあたり少なくとも3m²
- 2) 他の種と複合で飼育する場合：1ペアあたり少なくとも15m²

いずれの施設も、高さは2m程度以上であることが望ましいが、衝突による外傷を防ぐため、特に梁などの凹凸がある天井では下にネットを設ける等の事故防止策を行う。

1-5 構造、設備

単独またはペアをキジ舎等で飼育する場合、地面はコンクリートや川砂を使用し、清掃や消毒が容易にできる環境を整える。また、面積の狭い飼育施設では、消毒薬の効かないコクシジウム等に対する衛生管理として定期的な砂換えや砂の火炎消毒を心掛ける。フライングケージ等、他の種と複合で飼育する場合も天然の土壌の上に砂等を敷き、低木を多く植える。

いずれの飼育施設においても、夜間のねぐらとなるよう、雨や風の当たらない場所に高い止まり木を設置する必要がある。また、繁殖期には雄が雌に対して積極的になるため、低木の植栽や逃避可能な面積を確保する等、攻撃を避けるための十分な避難場所を設置する。

同一ケージ内にハト目やスズメ目等の他の鳥を飼育する事も可能だが、繁殖期に自然育雛を行う場合にはコサンケイが攻撃的になる可能性も考慮し、同居個体への攻撃に十分注意する。

同居のストレスなどによって疾病が活性化することもあるため、若い雄を複数同居させる場合には優位な個体から劣位個体が逃避できる場所を十分確保するよう止まり木や隠れ場所になる構造物を多く設置する。

飼育場所は常に野生動物の侵入を防ぎ、捕食を避けるための構造でなければならない。使用する網目は適度に太い金網を使用し、ネコやタヌキ、アオダイショウ等による捕食を防ぐため、網目の幅は2cm以内であること。周辺にこれらの野生動物が多くみられる飼育場所においては、個体の休息や産卵の場所はこれらの捕食動物から届かない場所になるよう設置する。

1-6 水

飼育場所には常に清潔な飲み水が供給できるよう、地上に給水器等を設置する。

2 健康管理

2-1 餌

一般的なキジ類の飼育管理における飼料のほかに特別な栄養を要する種ではないが、キジ用ペレットやニワトリ用配合飼料に果物、青菜を混ぜ、カキガラ等を添加する。餌は地上に設置し、雨に濡れることが無いよう必要に応じて屋根等を設置し、筋胃での消化を助けるためのグリットとして適宜飼育場所に砂を補給する。

繁殖期にはビタミンとミネラルを添加するとともに、蛋白質を通常より多く配合する。蛋白質の給与としては魚粉やコイ用ペレットを配合飼料中に混ぜる方法や、ドッグフードを砕いて添加する方法もある。ドッグフードを与える際には脂肪分と塩分の多いものもあるため給餌頻度を考慮するとともに、お湯に浸してから与えるようにする。育雛期の蛋白質の供給としてはワーム類の給餌も有効である。

特に 0~2 週齢の人工育雛において、青菜は細かく切るか、雛が少しずつ引きちぎれるように固定して給餌する等、給餌方法に注意する。青菜を飲み込みきれずに口から垂らした状態の場合、これを無理に引き抜くと雛の食道が傷つくため、口元でちぎってやる。

2-2 水

糞尿として多くの水分を排出するため、特に産卵期や夏季は新鮮な水を与えること。給水器内にビタミン剤等を添加することも栄養管理上有効であるが、容器の清掃を念入りに行う。

2-3 疾病(予防、治療、(考慮すべき感染症))

本種には種特異的な疾病等は見られず、飼育個体群の中でも近親交配に比較的強い種であると考えられている。EEP および国内/国際血統登録上で報告されている主な死因は以下のとおり。

1) 頭部外傷

同居時の事故によるものが主であり、繁殖ペアを変更する場合にはストレスを軽減させるための予防措置が必要である。特に繁殖期の雌は慎重に観察する(2-1 参照)。

2) アスペルギルス症

特に 2 歳齢までの若い個体で多くみられ、初期症状としては開口呼吸と体重減少がみられる。敷料や残餌の堆積を避け、飼育環境を衛生的に保つこと。個体間のストレスによって発症することもあるため、他個体との同居飼育の場合には十分な飼育面積をとり、とまり木や隠れ場所になる植栽の設置など劣位の個体が優位個体から逃避できる環境を提供するべきである。

3) 鳥結核

多くの場合、感染鳥は臨床症状を示さないが、慢性的な消耗、下痢などの他、まれに呼吸器系の兆候を示し、死亡例も報告されているが、有効な治療方法は無いため、家畜伝染病予防法による届け出伝染病に指定されている。新着個体については特に注意が必要である。飼育環境を衛生的に保つことで予防に努める。

4) ペローシス

孵化後 4 週齢までの個体に見られる疾病であり、常に同じ血統の鳥で発生するため、近親交配により起こるものと考えられる。日齢や症状によってはテーピング等により矯正することも可能。

5) 高病原性鳥インフルエンザ

高病原性鳥インフルエンザは伝播力が強く、特に家禽に対しては高い致死性を示す感染症であることから家畜伝染病予防法による法定伝染病に指定されている。

感染は野鳥やネズミ等の野生動物との接触による侵入、又は飼料等の汚染によるものが考えら

れる。これらによるウイルスの侵入を防ぐため、防鳥ネットやネズミ返し等を設置して野生動物との接触を防ぐほか、飼育作業者は飼養施設への出入りの際に作業靴の消毒を行う等の衛生管理に努める。また、主な発生時期である秋季から春季にかけては野鳥の落下糞等による感染も考慮した施設での飼育が望ましい。

万が一飼育個体に感染が疑われる症状などが見られた場合には、直ちに飼育場所の周囲 5m を封鎖し、他の飼育鳥類や来園者による拡散防止を行うとともに簡易検査を行い、各自治体の指示に従ってウイルスの性状判定などの確定検査の依頼をする。

検査により、高病原性鳥インフルエンザウイルスに感染していることが確認された飼養鳥については、動物愛護及び感染拡大防止の観点から、できる限り苦痛を与えない方法を用いて殺処分することが原則である。ただし、本種は希少種であることから可能な限り治療を試みることを望ましく、各自治体の所管部署と相談し、事前に継続飼養の合意を得るとともに隔離飼養体制と治療計画を整えておき、万全の注意を払って治療を行うことも検討するべきである。

6) その他

すべての個体において寄生虫感染が起こりうる。特にカピラリアやシンガムスは本種によく見られるため、年に2回、産卵前や猛暑中を避けた2月と9月頃に駆虫を行うことが望ましい。また、密閉空間で飼育する場合は、病原体の蓄積を避けるため、定期的な換気を心掛けたい。

3 繁殖

3-1 繁殖年齢

飼育下では雌は1歳齢から受精能力があることが証明されているが、前述のとおり個体間の攻撃を避けるため、通常雌雄とも2歳齢からの繁殖が望ましい。

3-2 ペア形成(個体選定、年齢、同居方法)

生息域内における繁殖行動については明らかになっていないことが多いが、通常一夫多妻の群れで生息し、繁殖期にはペアで生活する傾向があるとされている。常にペアで飼育管理されている動物園等においては、繁殖期に雄が攻撃的になる可能性を考慮し個体の性質や血統を配慮しながら同居個体を選定する必要がある。

新たにペアを形成する場合には、雄の攻撃による雌の死亡が多くみられることから同居の時期と組み合わせには十分注意する。特に雄は若い雌に対して非常に攻撃的になるため、ペア形成をする雌は2歳以上とし、同居開始は繁殖期を避け、産卵開始までの11月～1月頃に行うことが望ましい。同居に際しては、先に雌を飼育場所に入れ、雌が飼育場所に慣れた数日後に雄を入れる手順で行う。

通常は植栽の影や地上に設置した巣箱内に枯れ葉や砂を敷いた場所に産卵するため、産卵期に入る前に雨や風の入らない巣箱を設置し、巣材となる砂などを用意する。産卵間隔は24～36時間である。コサンケイは他のキジ類に比べてクラッチ数が少ない傾向にあり、平均的なクラッチサイズは4～6個であり、クラッチ間隔は約2週間である。卵はバラ色からクリーム色がかかったバフ色を呈し、白い小さな白斑がある。卵のサイズは45×36mm、抱卵期間は21～25日。

自然繁殖の場合、本種は雄が抱卵に参加することも報告されているが、個体によっては雄が雌や雛に対して攻撃的になる可能性もあるため、抱卵・育雛期間中は注意深く観察するべきである。ペア以外の雄は雛に対して攻撃的であるため、繁殖に供するペアを飼育する際は他の個体から分けて飼育する。自然育雛は4～5歳齢の雌で特に成功しやすく、孵化した個体は11月から12月頃まで親と同居が可能である。

3-3 人工繁殖、人工哺育

人工繁殖の場合の孵卵条件は温度 37.5～37.6℃、湿度 55%、孵化直後の個体は床面の温度

が 27～30℃程度になるよう育雛箱の温度を保つ。自力採食は孵化後 2 日目から 3 日目から開始され、良質なキジの雛用配合飼料と小松菜等から給餌を開始する。雛は動くものに反応するため、小さいミールワーム類等を与えることで餌の場所を学習させることができる。

生後三か月ごろから雌雄の判別が可能な成羽への換羽がはじまる。同年に繁殖した個体は翌年の秋までは同一ケージ内での同居で事故無く飼育することが可能である。それ以降は分離することが望ましいが、雌を同居させていなければ暫くの間同一ケージ内で雄を複数飼育することも可能である。

参考文献

IUCN Red List

J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D.A. Christie : The Handbook of the Birds of the World, Lynx Edicions.

Lophura edwardsi (2013): HUSBANDRY GUIDELINES. Alain Hennache EEP species coordinator.

津布久隆(1990): ヤマドリの増殖方法と放鳥のあり方. 栃木県民の森管理事務所研究報告 No. 2 別冊.

山崎亨監訳: 鳥類の人工孵化と育雛. 文永堂出版株式会社.